

遺構内堆積貝塚のもつ意味について

——有吉北貝塚の一事例の場合——

上 守 秀 明

I

貝塚に関する研究は、日本における科学的な考古学研究の端緒となった大森貝塚の調査および報告以後、100年以上を経過し、その時々において問題点を提出しながらも、成果は着実にあげられてきた。そして、これらが縄文時代研究進展のための中枢的役割りを果たしてきたと考えるのは、おそらく異論のないところであろう。つまり、貝塚が他の遺跡では遺存しにくい有機質の遺物をのこしていることや、他の遺跡と比較して堆積状態が識別しやすい等、好条件を備えていることに起因する為と思われる。

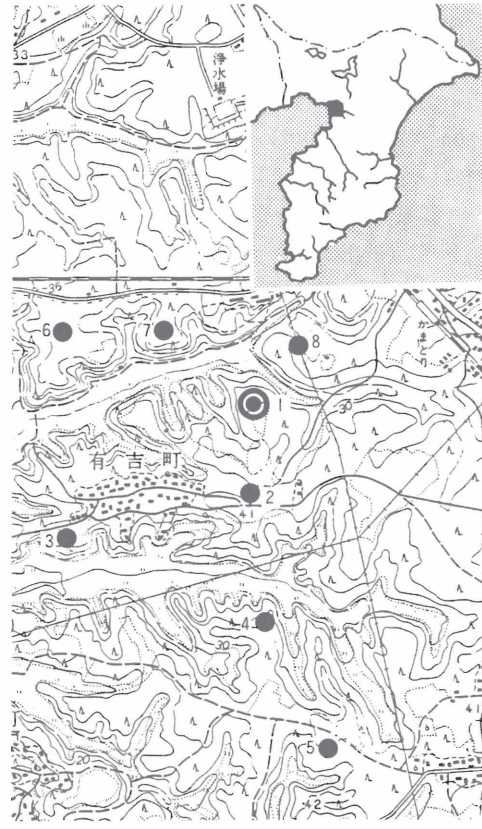
貝塚研究のあゆみと個々の研究の位置づけについては、既に諸先学によって詳述されているので(註1)、これらを参照していただきたいが、最近の主な研究動向としては、①動植物遺存体そのものの詳細な研究と、自然科学的手法や統計的処理をこれらに用い、古環境や生産活動の復原を試みる研究、②貝塚を伴う集落の生産活動の意義を遺跡群総体の中で捉えようとする研究、③人骨や動物遺存体の出土状態や、貝塚の成因から精神文化の復原を試みる研究等があげられるものと思う。

報告する事例は、こうした研究のうち③にいくばくかの新資料を提供するものと考え、若干の私見とあわせ紹介してみたい。

II

有吉北貝塚は、千葉市有吉町730他に所在する。村田川は千葉市小食土町付近に源を発し、台地を複雑に開析しながら東京湾へ注いでいる。こうした台地上、とりわけ下流域では数多くの遺跡がのこされている。本貝塚もこの中の一つで、高沢支谷より分岐した2つの小支谷と、さらにその一方と枝分かれした谷によって深く刻まれた、半ば独立丘陵状を呈した台地上に位置している(第1図-1)。

この貝塚は、過去に調査歴をもたないが、比較



1.有吉北貝塚 2.有吉南貝塚 3.大井戸作貝塚 4.木戸作貝塚
5.小金沢貝塚 6.高沢遺跡 7.南二重堀遺跡 8.鎌取遺跡
(1/25,000 蘇我№54-19-15-2)

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

的古くから存在の知られていた貝塚で、小字名を冠して日照田貝塚ともよばれている。未読ではあるが、1881年に加部巖夫氏によって、好古雑誌誌上の「古器物見聞之記」の中で、現千葉市内の貝塚の1つとして、紹介されているようである。

その後、1952年に武田宗久氏によって存在が再確認され、後期堀之内式・加曾利B式を主体とし、中期加曾利E式にも属す時期の貝塚であることが、一般に認められていった(註2)。

日本住宅公団(現在の住宅都市整備公団)によって、千葉市東南部地区に大規模な土地区画整理事業が計画され、1974年から工事に先行して埋蔵文

化財の調査が開始された。本貝塚も開発の対象となり、まず貝層の分布する範囲を正確に把握するために、ボーリング調査が実施され、その結果この貝塚に関して重要な新知見がもたらされた(註3)。それは貝塚の形態と規模がおおよそ把握されたことである。すなわち貝塚は、この台地では北西に突出する先端に近い位置にあり、台地縁辺部から斜面部にかけての比較的大きな貝層と、平坦部上の小規模な地貝塚群から構成される、長径約130m×短径約100mの点列環状貝塚であることが判明したのである(註4)。また採集された遺物より、貝塚の形成時期が中期中葉まで溯ることが予測された(前出3)。

1984年度からの発掘調査によって、本貝塚は中期中葉から後葉にかけて形成された、貝塚を伴ういわゆる環状集落であることが明らかにされつつある。すなわち、中央部に遺構分布の極めて希薄な部分を有し、これをとり囲むように外縁部には住居跡群が分布し、更にその内側には土塚が激しく群在しているのである(註5)。調査途中の段階の数字なので、最終的な報告によって訂正されるべきものであるが、全体の約1/2を調査した結果、住居跡約90軒、土塚約600基が検出されており、これらは先述した時期の所産である。過去に記載のあった堀之内式・加曾利B式のもの、今のところ検出されていない。また、ここには縄文時代早期末葉の炉穴群や古墳時代後期以降の集落・中世の墳墓がつくられている(註6)。

周辺遺跡について、縄文時代に属する遺跡を中心に述べるならば、細尾根によって地続きとなって同一台地上に位置する有吉南貝塚(第1図-2・註7)をはじめ、調査以前に消滅した大井戸作貝塚(同図-3・註7)・木戸作貝塚(同図-4・註8)・小金沢貝塚(同図-5・註9)・上赤塚貝塚・六通貝塚などの貝塚群や、高沢遺跡(同図-6・註10)・南二重堀遺跡(同図-7・註11)・鎌取遺跡(同図-8・註12)などの貝塚を伴わない中期の遺跡群が挙げられよう。

そして本貝塚は、この地域に密集して形成された、これらの後期を主体とする貝塚群や、また中期の貝塚を形成しない遺跡と比較検討する上で、市原市草刈貝塚(註13)とならび、村田川下流右岸域では重要な中期貝塚となるであろう。

III

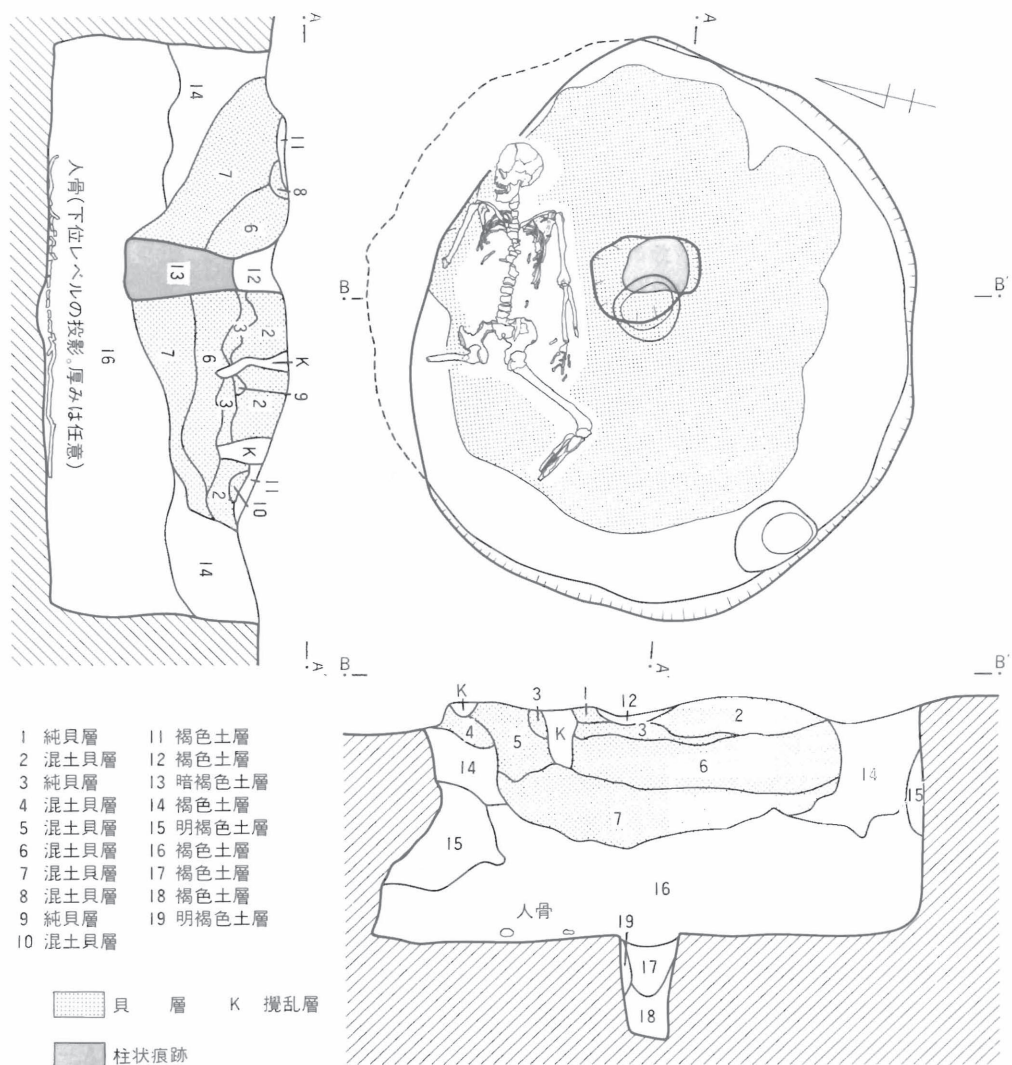
遺構内堆積貝塚というのは、本来の構築物としての機能を有しなくなった窪みに、あらたな成因をもって堆積した貝塚を指すことにしたい。今回報告するものは、有吉北貝塚で点列環状貝塚を形成しているうちの、平坦部に位置する土塚内に堆積していたものの一つである。第2図に示したものを、順を追って説明してみたい。

(土塚の形態) 平面形は開口部ではやや不整の楕円形、底部ではこれもやや不整の円形を呈し、それぞれ長径約230cm×短径約195cm、直径約220cmをはかる。平面形・断面形(B-B')より、北側が袋状を呈する土塚である。深さは、確認面より底面まで約85cmをはかる。底面のほぼ中央と南西部の壁際にピットが穿たれており、規模はそれぞれ直径約25cmと長径約35cm×短径約25cm、深さ約40cmと約55cmをはかる。

(貝層の形態) 平面形は不整楕円形を呈し、確認面で最大規模となり、長径約180cm×短径約160cmをはかる。断面形は、確認面での精査中に若干、原形が損われてしまった部分があるかもしれないが、概略は所謂の凸レンズ状の堆積を示していると思われる。厚さは、中央部の厚みの最もある部分で、平均約50cmをはかる。

(覆土の状態) 全部で19層に分けられる。このうち貝層は、1～10層に分けられる。1層：イボキサゴの純貝層。2層：イボキサゴを主体とし、ハマグリを少量含む混土貝層。3層：破碎されたイボキサゴの純貝層。4層：ハマグリを主体とする混土貝層。5層：小形ハマグリを主体とし、小形アカニシ・アサリ等を少量含む混土貝層で、貝殻の堆積は縦方向に並ぶ。6層：小形ハマグリを主体とし、小形アカニシ・アサリ等を少量含む混土貝層で、5層より混土率が高い。貝殻の堆積にも規則性がない。7層：中小形ハマグリを主体とし、シオフキ・ツメタガイ等を含む混土貝層。8層：イボキサゴを主体とし、破碎イボキサゴを微量含む混土貝層。9層：アサリの純貝層。10層：破碎ハマグリを主体とした混土貝層。

堆積土層は、11層～19層に分けられる。11層：褐色土層。12層：粒子の細かい褐色土層。堆積は疎である。13層：粒子が均一な暗褐色土層。堆積は疎である。14層：粒子の細かい褐色土層。15層：ロー



(土層中の説明は本文中参照)

第2図 遺構実測図(1/30)

ムブロック主体の明褐色土層。16層：ロームブロックを多く混入する褐色土層。堆積はやや密である。17層：褐色土層。18層：小形のロームブロックを少量含む褐色土層。19層：明褐色ロームブロック。というように、各層の特徴があげられる。(人骨) 明らかに埋葬されたものである。埋葬位置は、底面直上の北側の壁際付近に寄っている。遺存状態は、比較的遺存が良好な四肢骨のうち、右橈骨と尺骨・右脛骨と腓骨が失われ、右上腕骨・左橈骨と尺骨・右大腿骨の遺存状態も不良であるが、埋葬体位を想定するには十分な状態である。直接遺体を被っていた土は、有機体の遺存しにくい酸

性のロームブロックを多く含んだものであったが、上層に厚く堆積した貝層から浸透したカルシウム分によって、このような土壌中でも遺存せしめたのであろう。こうした関係については、第2図の人骨と貝層分布の位置関係より明らかで、四肢骨の遺存不良の理由もうなずける。埋葬体位は、頭を横に傾いでながらも上体は仰臥姿勢、下肢はおそらく外側に強く「く」の字に折り曲げているものと思われる(註14)。人骨に伴う遺物は、確実なものはない。なお、性別など分析鑑定が未了なので、不明な部分も多いことを断っておきたい。(出土遺物) 土器片・石器・貝刃・獣骨・黒曜石

片等が約90点ほど出土しているが、大部分が16層より上位である。土器片は加曾利E I・II式のものである。

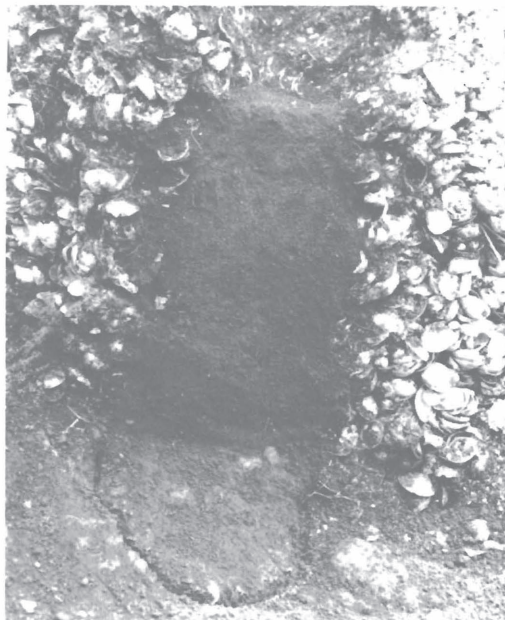
IV

以上述べてきたデータから、土壇覆土内に形成された「遺構内堆積貝塚」の形成過程を復原し、その意味を考えてみよう。

土壇は、中期中葉から後葉に盛行する小竪穴ともよばれるものである。はたしてこの土壇が、どんな用途のために構築されたのか、実際に床面直上から埋葬人骨が検出されていることを念頭においた上で、まずこのことから考えてみたい。土壇は底面の中央と壁際にピットをもつが、前者はその位置と平面形・断面形から柱穴と考えられる。また後者は底面が上面より壁側に寄る傾向が認められるもので、補助的な柱穴と考えるよりは、土壇に付随する施設と考えた方がよいと思われる(註15)。そして、こうした性格のピットを有する土壇の用途は、貯蔵穴と考えた方が無理がないと思われる。また、第2図のB-B'の土層断面図から、埋葬後に人骨を被った16層の堆積以前に中央部のピットが異なった土壌で埋まっていることも、この考えを補強するだろう。つまり、第一義的な用途として貯蔵穴として使用された後に、墓壙として転用されたものと考えられる。

そして遺体の埋葬に伴い、16層・15層が土壇を半分程埋め、その後に余り時間の経過しない段階で土質の異なる14層が埋めていると思われる。そして1~10層の貝を中央の窪みに入れるにあたって、柱状の構築物を16層上面に垂直に押し立てて、その周囲を貝で順をおって埋めていったのではなかろうか。

これらに関してはもっと個別に説明を加えなければならぬであろう。まず、柱状の痕跡(註16)と考えたものは、13層とし、濃いスクリーントーンで示した部分である。これは土層の説明で述べた様に、他の部分と明確に識別できるものである。当初、貝層上面の広がりを見査した際に貝の分布が欠落する部分として平面分布を記録したが、さして重要視しなかったのである。そしてこの部分が丁度、貝層のコラムサンプルの採取地点にかかっていたので断面を切ってみると、第3図にみられるような断面状態が見事にあらわれたのである。



第3図 柱状痕跡の断面状態拡大

そこで採取地点を変更し、柱状痕跡の底面と壁を精査してみると、16層上面を2~3cmほど窪めた底面と、壁面の6・7層の貝層が破碎されることなく認められたのであった。このことから、先に想定した柱状構築物の埋設の順序については、説明できると思われる。なお、平面での柱状痕跡の上面の広がりや窪みに堆積した土層である12層は、柱状構築物埋設後に風水的作用によって、その周囲が若干広がったり窪んだりした結果、そこへあらたに流れこんだものとして、理解できよう。

次いで14層の理解である。第2図のA-A'の断面図では、典型的な三角堆積を示している。これから貝層と14層との堆積順を考えると、14層が自然堆積した後に、その窪みに貝が入られたとも考えられるが、B-B'の断面図では、貝層との堆積関係から自然堆積とは考えられず、やはり貝層を入れるのと連続して、人為的に堆積した土層であると考えの方が妥当であろう。

最後に1~10層の貝層についてだが、もちろん人為的堆積であることにはまちがいないが、分層された貝層のなかで明らかにある種類だけを選択したり並べたものがある。1・3・5層が代表されよう。このことは、貝層がただ単に柱状構築物を埋設させる為や窪みを埋める為にだけ入れられたのではなく、柱状構築物を埋設するに際して何かしらの儀礼行為が行なわれた根拠になるものと

思われる。

さて、こうした可能性を検討していくにつれて、遺体が埋葬され、柱状構築物を埋設し、遺構内堆積貝塚が形成されるまでは、短期間に連続した行為であったように思われる。言い換えれば、遺体の埋葬と柱状構築物と遺構内堆積貝塚との間には、有機的関連が見い出されると言えよう。このことから柱状構築物の痕跡について、積極的に言及するならば、墓標（モニュメント）埋設の痕跡と考えられないだろうか。以上の検討から、本例の遺構内堆積貝塚は、葬送儀礼行為の一所産として扱えられるべきと思われる。類例の追加が望まれる。

V

最近、関根孝夫氏によって、貝塚の形成とその意義について、単に現在のこされている最終的な形態で論じるのではなく、時間的空間的に分解し、遺跡構成の単位として扱えようとする試みがされた。それは、氏を中心にして調査された松戸市内の貝の花貝塚・子和清水貝塚・幸田貝塚における具体的な事例から貝塚型を設定し、その成因を分析し、その時期的変遷や精神活動の所産としての可能性を述べられているもので、注目される視点と思われる（註17）。従来より、貝塚のもつ精神的側面は指摘されているが（註18）、さらに具体的な事例を成因から分析していることは、重要である。本例も当初はサンプリングを予定していた位置に柱状痕跡があらわれた為、その成因について注意して調査されたので、ある程度の子察ができたものである。今後も継続している調査のなかで、注意していきたいと思う次第である。

拙稿をまとめるにあたり、小宮孟・石田守一・倉田恵津子・今泉潔・永沼律朗・横山仁・出口雅人の諸氏には、御教示・御協力をいただいた。末筆ながら記して深謝したい。

註

- 1) 後藤和民「縄文集落と貝塚」『季刊どるめん』24・25 1980
牛沢百合子「縄文貝塚研究序説」『同上』同上
堀越正行「千葉貝塚研究史」『千葉県の貝塚』1983
- 2) 武田宗久「原始社会」『千葉市誌』1953
伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』1959
酒詰仲男『日本貝塚地名表』1959
後藤和民「原始集落研究の方法論序説」『駿台史学』27 1970
堀越正行「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学』31 1972
千葉市教育委員会『千葉市史』史料編I 1976
この他に1966年6月に明治大学考古学研究所によって、千葉市内のフィールド調査が行われ、本貝塚からも遺物が採集されている。未報告ながら出口雅人氏によって、阿玉台式・加曾利E式土器の出土が確認されている。
- 3) 1983年度調査。『千葉県文化財センター年報』9 1984
- 4) 前出3)の図版を参照されたい。また、1984年度からの発掘調査によって、貝塚の約1/2が調査されつつあるが、これによってあらたに斜面貝塚2ヶ所・地点貝塚が数ヶ所発見されており、調査の進捗によってさらに追加されるものと思われる。
- 5) 地形が馬背状の台地である為、平坦部の狭小な部分には住居跡の密度が薄く、住居跡の分布形は相弧状に近い。またこの集中部の外側にも、遺構は散見される。
- 6) 中世墳墓については、本号において調査研究員 笹生衛氏が報告している。
- 7) 前出2)の文献では、日照田貝塚（有吉北貝塚）・大井戸作貝塚（有吉南貝塚）・有吉宮前貝塚（有吉貝塚）と遺跡名がそれぞれ付けられている。大井戸作貝塚は調査以前に消滅しており、我々は現在、有吉宮前貝塚を有吉南貝塚とよんでいる。日照田貝塚が有吉北貝塚であるので、立地からみれば適当とも思われるが、過去の命名も無視はできない。混乱をひき起す前に整理しておく必要がある。
- 8) 郷田良一・小宮孟他『木戸作遺跡第2次』1979
- 9) 郷田良一・小宮孟他『小金沢貝塚』1982
- 10) 1981・1982年度調査。『千葉県文化財センター年報』8 1983
- 11) 古内茂・伊藤智樹他『南二重堀遺跡』1983
- 12) 1983・1985年度調査。『千葉県文化財センター年報』9 1984
- 13) 1980年度調査。『千葉県文化財センター年報』

- 6 1981 報告書近刊予定。
1982年度調査。『千葉県文化財センター年報』
8 1983

田井知二「千葉急行線内草刈貝塚で発見されたイノシシ頭骨と焼土堆積遺構について」『研究連絡誌』6 1983

- 14) 右下肢骨の状態は、左大腿骨の長さから推測すれば、右膝蓋骨で土壇の壁面に接してしまい、それ以下を伸ばすことは不可能と思われる。左下肢骨と同様であると考えるのが妥当だろう。
- 15) 中央のピットが柱穴であり、これに柱を埋めて上屋がけを行なった場合、それを補助的に支える柱は、底面に穿つより、上面の周囲に穿った方が有効と思われる。
- 16) 柱状痕跡・柱痕跡が貝層中に検出された遺跡としては、前期関山期の松戸市幸田貝塚・中期加曽利E末期の千葉市中薮遺跡(1985年度調査。今泉潔氏御教示。)があげられる。いずれも住居内堆積貝塚で、幸田貝塚では床面に山積みされた貝塚が、上屋構造のあるうちに堆積した証左と考えている。いずれも柱穴の位置と一致

したり、住居上屋構造以外の柱構造を想定したり、本遺構の場合とは性格が異なるようである。

前田潮他「幸田貝塚第3次調査概報」1973

前田潮「貝塚にみる縄文人の精神生活」『縄文人の精神生活』歴史公論94 1983 古里節夫他「島崎遺跡・幸田貝塚(第10次調査)」1984

17) 関根孝夫「貝塚覚書」『日本史の黎明』八幡一郎先生頌寿記念考古学論集 1985

18) 西村正衛「埋葬」『日本の考古学 縄文時代』1965

(追記) 脱稿後、民俗例に基じるしとしてたてられたものがあるのを知った。それは息つき竹と称し、竹を土盛に立てるもので、①竹を通して死者の霊魂が出てゆく。②竹を通して死者が蘇る。という相反する説明がされている。縄文時代の本例とのつながりは全く実証できないので、その解釈はあてはめられないが、竹が腐朽した場合、本例の様な痕跡をのこすと思われる(井之口章次「仏教以前」1954『葬送墓制研究集成 第4巻 墓の習俗』1979に所収)。

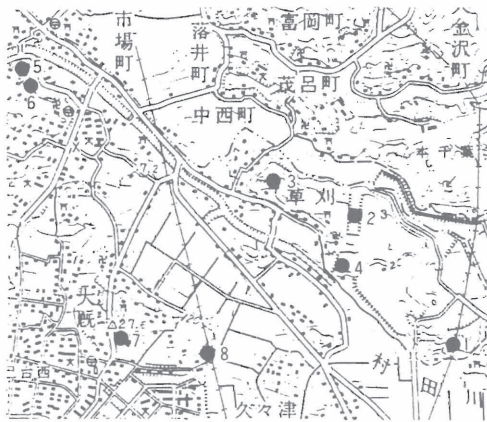
(第2班 千葉東南部事務所)

川焼台遺跡出土の2号銅鐸について

相京 邦彦・白井久美子・金子 進

1. はじめに

ここで紹介する小型銅鐸は、昭和60年6月5日



1.川焼台遺跡 2.草刈遺跡A区 3.草刈1号墳 4.草刈3号墳
5.新皇塚古墳 6.菊間遺跡 7.大厩古墳群 8.大厩遺跡
第1図 周辺主要遺跡位置図(千葉1/50,000)

に出土したものである。川焼台遺跡では昭和58年10月12日にも1点出土しており、すでに資料紹介がされている(註1)。同一遺跡から2点の小型銅鐸が出土したのは、全国で初めてである。

川焼台遺跡は、村田川の北岸段丘上に立地している。標高は約40~45mである。北側の支谷は「じんべえ支谷」と呼ばれ、西方に開析し、草刈遺跡・中永谷遺跡の間をぬけ、茂呂谷へつづき、村田川に流入している。

昭和58年に草刈31・32号墳を調査し、1号銅鐸を32号墳丘下の調査中に検出した。この古墳の立地する台地には川焼台遺跡の一部として考えられる集落が展開しており、現在では1号銅鐸の出土遺跡は川焼台遺跡としている。川焼台遺跡は、確認調査を昭和59年1月から3月まで実施し、昭